

『源氏物語』 宇治十帖の端役

——「手習」巻における中将の役割——

福 永 佳 子

一

『源氏物語』には、多くの脇役が登場し物語の展開を支えている。続編に位置する宇治十帖でも、脇役または端役と呼ばれる人物がたびたび姿を見せるが、こうした人々の存在は、物語正編よりもむしろ続編において大きく扱われているように思われる。物語の中心人物にかわり、時にはその人物に、そして物語の展開に大きな影響を与える脇役の役割と、その登場の意味を探り、宇治十帖の特筆すべき描写手法を明らかにする一端としたい。

宇治十帖に登場する脇役としては、物語正編からその姿を見せる夕霧や明石中宮をはじめ、宇治の阿闍梨、中将の君、弁の尼、横川の僧都、右近、侍従、小宰相の君などがあげられよう。こうした人物は、物語の展開にかかわっていたり、事件の「語り役」になっていたりすることも少なくない。脇役ではあるが、その登場回数は意外に多いと言いうことができるだろう。これに対して、いわゆる端役と呼ばれる人

物も多数登場する。本稿では、先にあげた脇役ほどの登場は見られないが、それでも看過できない役割を担っていると考えられる中将（小野の妹尼の娘婿）という人物に注目する。

従来の研究において、中将は、蘇生した浮舟を出家に追いやる原因を作った人物と捉えられることが多く、しばしばその役割を中心に論じられている¹⁾。確かに、浮舟が出家に向かう過程に中将がかかわっているとする説は首肯し得るものであるが、物語も二巻を残すだけになった「手習」巻で、あえて新出の人物を登場させたのはなぜなのだろうか。作者は、物語の結末近くになって、既出の人物だけでは対応できなかった何かを、中将を使って描こうとしたと考えられる。端役でありながら、代替不可能な人物でもある中将の役割および登場の意味と、その登場による物語展開の方法について考えてみたい。

二

中将が登場する「手習」巻は、初瀬詣での帰途、小野の妹尼の一行

が、母尼の発病により、宇治院に一時とどまることになることから
はじまる。その宇治院の裏手で倒れていた浮舟を横川の僧都が見出し、
妹尼が自分の亡き娘の代わりと思ひ手厚く介抱する。妹尼の浮舟に対
する看病は、小野の僧庵に移して続けられ、下山した横川の僧都の加
持によつて、ようやく浮舟は快方に向かう。このように浮舟の発見と
介抱の様子が語られた後、中将は物語世界に登場するのである。その
初出の場面は次のように描かれている。

① 尼君の昔の婿の君、今は中将にてものしたまひける、弟の禪師
の君、僧都の御もとにものしたまひける、山籠りしたるをとぶら
ひに、はらからの君たち常に登りけり。横川に通ふ道のたよりに
よせて、中将、ここにおはしたり。前駆うち追ひて、あてやかな
る男の入り来るを見出だして、忍びやかにておはせし人の御さま
けはひぞさやかに思ひ出でらるる。これもいと心細き住まひのつ
れづれなれど、住みつきたる人々は、ものきよげにをかしうしな
して、垣はに植ゑたる撫子もおもしろく、女郎花、桔梗など咲き
はじめたるに、いろいろの狩衣姿の男どもの若きあまたして、君
も同じ装束にて、南面に呼び据ゑたれば、うちながめてあたり。

〔手習〕卷 三〇四〜三〇五頁

まず、中将がどのような人物であるかが端的に紹介され、あわせて小
野を訪れた理由が語られている。ここでは、浮舟の世話をする小野の
妹尼と、その兄の横川の僧都、そして中将の關係が示され、現在の浮
舟を取り巻く人間關係が明らかにされるのである。中将は極めて自然

な形で物語世界に登場していると思われる。

僧庵に入ってくる中将の気品ある姿を視界に捉えた浮舟は、かつて
自分と大きくかわつた薫（註2）を、そして宇治の地を思い出す。ここ
から浮舟にとつて、中将は最初から薫を想起させる人物であつたこと
が知られる。薫を髣髴とさせる中将と浮舟との關係が今後の物語を左
右することは想像に難くないと考えられる。さらにこの後も中将の紹
介は続いている。

② 年二十七八のほどにて、ねびととのひ、心地なからぬさまもてつ
けたり。〔手習〕卷 三〇五頁

③ 尼君、障子口に几帳立てて対面したまふ。まづ、うち泣きて、
「年ごろの積もりには、過ぎにし方いとどけ遠くのみなんはべる
を、山里の光になほ待ちきこえさすることの、うち忘れずやみは
べらぬを、かつはあやしく思ひたまふる」とのたまへば、「心の中
あはれに、過ぎにし方のことども、思ひたまへられぬをりなきを、
あながちに住み離れ顔なる御ありさまに、怠りつつなん。山籠り
もうらやましよう、常に出で立ちはべるを、おなじくはなど、慕ひ
まとはさるる人々に、妨げらるるやうにはべりてなん。今日は、
みなはぶき棄ててものしはべりつる」とのたまふ。「山籠りの御う
らやみは、なかなか今様だちたる御ものまねびになむ。昔を思し
忘れぬ御心ばへも、世になびかせたまはざりけると、おろかなら
ず思ひたまへらるるをり多く」など言ふ。

〔手習〕卷 三〇五〜三〇六頁

中将はこの時、二七・八歳とされ、年齢の上でも薫と重ねられていることが分かる。娘亡き後、五・六年が経過した今になってもお、中将を「山里の光」と思っているとする妹尼の言葉から、この人物に込められた期待の高さがうかがわれる。こうした並々ならぬ設定を行った背景からは、薫などといった都の貴族を想起させ、都と小野をリンクさせようとする作者の用意を見出すことができる。さらに中将は、外見だけでなく内面においても「山籠り」を「うらやまし」く思うなど、薫と重なる点が少なくない。まったくつながりを持たない中将と薫であるからこそ、その意外なまでの共通点は強く印象付けられるのではないだろうか。

④ 人々に水飯などやうのもの食はせ、君にも蓮の実などやうのもの出だしたれば、馴れにしあたりにて、さやうのこともつつみなき心地して、むら雨の降り出づるにとどめられて、物語しめやかにしたまふ。言ふかひなくなりにし人よりも、この君の御心はへなどのいと思ふやうなりしを、よそのものに思ひなしたるなん、いと悲しき、など忘れ形見をだにとどめたまはずなりにけん、と恋ひ惚ぶ心なりければ、たまさかにかくものしたまへるにつけても、めづらしくあはれにおぼゆべかめる間はず語りもし出でつべし。

〔手習〕巻 三〇六―三〇七頁

さらに、妹尼と中将との交流が描かれる。この場面で降り出した「むら雨」については、新編日本古典文学全集頭注において「中将と妹尼の涙の対面でもあることを暗示するか。」と指摘されている^{注3)}。そう

した見方も首肯できるが、ここではさらに、この後語られる妹尼の話、および中将が浮舟のことを尋ねる場面につなげるものとして「むら雨」が描かれていると考えられるのではないだろうか。つまり、「むら雨」は、それまで誰にも浮舟のことを明かさずとなかった妹尼の口を開かせるものとして、また中将の足どめをするものとして描かれている道具であると考えられる。

中将の初出の場面には、しばしば今後の展開を予感させる要素を見出すことができる。中将は、過去から逃れたいと願う浮舟に、強制的に往時を思い出させる人物として設定され、造形されたのではないだろうか。

三

ここからは、浮舟の出家までの中将の動きについて考える。

⑤ 御前なる人々、「故姫君のおはしましたる心地のみしはべるに、中将殿をさへ見たてまつれば、いとあはれにこそ。同じくは、昔のさまにておはしまさせばや。いとよき御あはひならむかし」と言ひあへるを、あないみじや、世にありて、いかにもいかにも人に見えんこそ、それにつけてぞ昔のこと思ひ出でらるべき、さやうの筋は、思ひ絶えて忘れなん、と思ふ。〔手習〕巻 三〇七頁

これは④の引用に続く場面で、中将が最初に小野に来訪した時と時間的にもつながっている。妹尼に仕える女房たちは、かつて婿君として

迎えていた中将の来訪を受けて、妹尼の娘の代わりである浮舟と中将の縁組を期待する。女房の言葉を耳にした浮舟は、自らの苦しい過去を思い出すことになるとして、そうした期待を強く否定するのである。浮舟の内面の成長がうかがわれる一節と言うことができるだろう。ここから中将という人物が、妹尼だけでなくそばに仕える女房の間でも高く評価されていたことが看取できる。小野の山里の人々にとつて、中将は並々ならぬ人物であり、浮舟の相手と目することに不自然な点はないのである。

中将は、この時点で既に浮舟のことを垣間見ていた。山里には不似合いな浮舟の姿が強く心に残った中将は、さっそくその素性を探りはじめた。

⑥ 仕うまつり馴れにし人にて、あはれなりし昔のことどもも思ひ出でたるついでに、「かの廊のつま入りつるほど、風の騒がしかりつる紛れに、簾の隙より、なべてのさまにはあるまじかりつる人の、うち垂れ髪の見えつるは、世を背きたまへるあたりに、誰ぞとなん見驚かれつる」とのたまふ。姫君の立ち出でたまへりつる後手を見たまへりけるなめり、と思ひて、ましてこまかに見せたらば、心とまりたまひなんかし、昔人はいとこよなう劣りたまへりしをだに、まだ忘れがたくしたまふめるを、と心ひとつに思ひて、「過ぎにし御事を忘れがたく、慰めかねたまふめりしほどに、おぼえぬ人を得たてまつりたまひて、明け暮れの見ものに思ひきこえたまふめるを、うちとけたまへる御ありさまをいかでか御覧じつら

ん」と言ふ。かかることこそはありけれとをかしくて、何人ならむ、げにいとをかしかりつと、ほのかなりつるを、なかなか思ひ出づ。こまかに問へど、そのままにも言はず、「おのづから聞こしめしてん」とのみ言へば、うちつけに問ひ尋ねむもさまあしき心地して、「雨もやみぬ。日も暮れぬべし」と言ふにそそのかされて、出でたまふ。

〔手習〕 卷 三〇八〜三〇九頁

中将が、垣間見た浮舟のことを、昔なじみの少将の尼に問う場面である。中将は、浮舟のことを言い出す前に、人々の自分に対する思惑を気にし話題にのぼらせており、ここでも薫との共通点が強調されている。この場面において、少将の尼が独断で浮舟のことを語る点は注目に値する。先にも述べたが、宇治十帖にはこうした脇役の動きが著しいのである。少将の尼も例外ではなく、今後出家への道を進むことになる浮舟のそばには、常にこの人の存在があると指摘できるだろう。

さまざまなことを考慮して、必要以上には話そうとしない少将の尼の態度に、焦って浮舟の情報を求めようとする自分の体裁の悪さを感じた中将は、供人に急ぎ立てられて帰ることにする。こうした中将の姿も薫と重なりはしないだろうか。

⑥の引用に続いて、浮舟を娘のように思っている妹尼も、浮舟と中将の縁組を望んでいることが記される。浮舟の周囲は、浮舟の意思とは関係なく中将側に傾き、次第に浮舟は孤独な立場に置かれることになるのである。

さらに、中将の詮索は続く。

⑦ 中将は、山におはし着きて、僧都もめづらしがりて、世の中の物語したまふ。その夜はとまりて、声尊き人々に経など説ませて、一夜遊びたまふ。禪師の君、こまかなる物語などするついでに、「小野に立ち寄りて、ものあはれにもありしかな。世を棄てたれど、なほさばかりの心ばせある人は、難うこそ」などのたまふついでに、「風の吹き上げたりつる隙より、髪いと長く、をかしげなる人こそ見えつれ。あらはなりとや思ひつらん、立ちてあなたに入りつる後手、なべての人とは見えざりつ。さやうの所に、よき女はおきたるまじきものにこそあめれ。明け暮れ見るものは法師なり。おのづから目馴れておほゆらん。不便なることなりかし」とのたまふ。禪師の君、「この春、初瀬に詣でて、あやしめて見出でたる人となむ聞きはべりし」とて、見ぬことなればこまかには言はず。「あはれなりけることかな。いかなる人にかあらむ。世の中をうしとてぞ、さる所には隠れむかし。昔物語の心地もするかな」とのたまふ。〔手習〕卷 三二〇—三二一頁

⑧ またの日帰りたまふにも、「過ぎがたくなむ」とておはしたり。さるべき心づかひしたりければ、昔思ひ出でたる御まかなひの少

將の尼なども、袖口さま異なれどもをかし。いとどいや目に、尼君はものしたまふ。物語のついでに、「忍びたるさまにものしたまふらんは、誰にか」と問ひたまふ。わづらはしけれど、ほのかにも見つけたまひてけるを、隠し顔ならむもあやしとて、「忘れわびはべりて、いとど罪深うのみおぼえはべりつる慰めに、この月ごる見たまふる人になむ。いかなるにか、いともの思ひしげさまにて、世にありと人に知られんことを、苦しげに思ひつものせらるれば、かかる谷の底には誰かは尋ね聞こえんと思ひつはべるを、いかでかは聞きあらはさせたまへらん」と答ふ。「うちつけ心ありて参り来むにだに、山深き道のかことは聞こえつべし。まして思しよそふらん方につけては、ことごとに隔てたまふまじきことにごそは。いかなる筋に世を恨みたまふ人にか。慰めきこえばや」など、ゆかしげにのたまふ。

出でたまふとて、畳紙に、

あだし野の風になびく女郎花われしめ結はん道とほくともと書きて、少將の尼して入れたり。尼君も見たまひて、「この御返り書かせたまへ。いと心にきけつきたまへる人なれば、うしろめたくもあらじ」とそそのかせば、「いとあやしき手をば、いかでか」とて、さらに聞きたまはねば、「はしたなきことなり」とて、尼君、「聞こえさせつるやうに、世づかず、人に似ぬ人にてなむ。うつし植えて思ひみだれぬ女郎花うき世をそむく草の庵に」とあり。こたみはさもありぬべしと思ひゆるして帰りぬ。

横川からの帰途、中将は再び小野の僧庵を訪れる。浮舟のことを妹尼に聞き出すためである。妹尼側も、中将の来訪を予想しており、物語は、浮舟が、再び恋の場に連れ戻されるかのような緊迫感を帯びてくる。中将の動きも、周囲の人々の対応も、かつて浮舟が入水にまで追い込まれた状況と極めて近似していることが指摘できるだろう。浮舟が、苦悶した過去と同様の状況下で、どのように対処するかが物語の中心になってくるのである。

⑨ 文などわざとやらんは、さすがにうひうひしう、ほのかに見しさまは忘れず、もの思ふらん筋何ごとと知らねどあはれなれば、八月十余日のほどに、小鷹狩のついでにおはしたり。例の、尼呼び出でて、「一目見しより、静心なくてなむ」とのたまへり。答へたまふべくもあらねば、尼君、「待乳の山のとなん見たまふる」と言ひ出だしたまふ。対面したまへるにも、「心苦しささまにてもものしたまふと聞きはべりし人の御上なん、残りゆかしくはべる。何ごとにも心になはぬ心地のみしはべれば、山住みもしはべらまほしき心ありながら、ゆるいたまふまじき人々に、思ひ障りてなむ過ぐしはべる。世に心地よげなる人の上は、かく屈したる人の心からにや、ふさはしからずなん。もの思ひたまふらん人に、思ふことを聞こえばや」など、いと心とどめたるさまに語らひたまふ。「心地よげならぬ御願ひは、聞こえかはしたまはんに、つきなからぬさまになむ見えはべれど、例の人にてあらじと、いとうたたあ

るまで世を恨みたまふれば。残り少なき齢の人だに、今はと背きはべる時は、いともの心細くおぼえはべりしものを、世をこめたる盛りにては、つひにいかごとなん見たまへはべる」と、親がりて言ふ。

この三度目の来訪の時、中将は物思いが多い自分と同じ性格の持ち主であるとして、「親がりて」対応する妹尼に、浮舟との交流を求めめる。中将と薫の類似は一目瞭然である。

浮舟への執心を増す中将とは対照的に、浮舟は彼をまったく相手にしようとなし。中将の態度を見れば見るほど、過去の苦しみを思い出す浮舟は、その状況から目をそむけることで平穩を得ようとしている。ひたすら中将を好ましい人物と思ひ、中将と浮舟の縁組を切望する妹尼をはじめとした小野の人々と、浮舟との間の溝は深まるばかりである。浮舟にとつて、過去を知る人物が皆無であるために安穩であった小野の山里での生活は、中将の登場によってにわかに終息を迎えたと考えられるのではないだろうか。ここで浮舟は、再び孤立無援の状態に引き戻されるのである。

妹尼の娘のことを話題に出し、小野の人々を味方につけた中将も、変わらない浮舟の冷淡な態度に、業を煮やして帰ろうとするが、それとどめたい妹尼は、勝手に代作した浮舟の歌を中将に詠みかける。浮舟の孤独はますます浮彫りになると考えられる。

⑩ 萩の葉に劣らぬほどほどに訪れわたる、いとむつかしうもあるかな、人の心はあながちなるものなりけりと見知りにしをりをり

も、やうやう思ひ出づるままに、「なほかかる筋のこと、人にも思ひ放たすべきさまにとくなしたまひてよ」とて、経習ひて読みたまふ心の中にも念じたまへり。(「手習」巻 三三二—三三三頁)

しきりに文を寄こす中将を、浮舟は過去のことを思い起こしてわずらわしく思う。中将の執拗な態度は、薫だけでなく匂宮のことまで浮舟に思い出させるのである。さらに、こうした便りは、「なほかかる筋のこと、人にも思ひ放たすべきさまにとくなしたまひてよ」という祈りや、経文を読み習う態度からも分かるように、浮舟を確実に出家の道へと導いている。新編日本古典文学全集頭注は、浮舟のこうした態度を、「尼になる用意」とし、「中将の求婚が執拗であればあるほど、浮舟は読経と念仏とによって抵抗する。一途な男の手を逃れるためにも道は一つしかない。周囲に向つて閉ざされた浮舟の心中に、出家の準備が整えられる。」と説明している(註4)。浮舟の心中思惟からも、その心の深化をうかがうことができるだろう。

九月になり、妹尼は初瀬にお礼参りに出かける。同行を勧める妹尼の誘いを断り、小野の僧庵に残つた浮舟のもとに中将から文が届く。この妹尼の初瀬詣では、浮舟の周囲から人を遠ざけるための用意であると思われる。さらに、中将の来訪が語られる。

⑪ 月さし出でてをかしきほどに、昼、文ありつる中将おはしたり。あなうたて、こはなぞ、とおほえたまへば、奥深く入りたまふを、「ごあまりにもおはしますかな。御心ざしのほども、あはれまさるをりにこそはべるめれ。ほのかにも、聞こえたまはんことも聞

かせたまへ。しみつかんことのやうに思しめしたるこそ」など言ふに、いとうしろめたくおほゆ。おはせぬよしを言へど、昼の使の、一とこゝろなど問ひ聞きたるなるべし、いと多く恨みて、「御声も聞きはべらじ。ただ、け近くて聞こえんことを、聞きにくしとも思しことわれ」と、よろづに言ひわびて、「いと心憂く。所につけてこそ、ものあはれもまされ。あまりかかるは」などあはめつつ、

「山里の秋の夜ふかきあはれをももの思ふ人は思ひこそ知れおのづから御心も通ひぬべきを」などあれば、「尼君おはせで、紛らはしきこゆべき人もはべらず、いと世づかぬやうならむ」と責むれば、

うきものと思ひも知らですぐす身をもの思ふ人と人は知りけり

わざと言ふともなきを、聞きて伝へきこゆれば、いとあはれと思ひて、「なほ、ただ、いささか出でたまへと聞こえ動かせ」と、この人々をわりなきまで恨みたまふ。「あやしきまで、つれなくぞ見えたまふや」とて、入りて見れば、例は、かりそめにもさしのぞきたまはぬ老人の御方に入りましたまひにけり。あさましう思ひて、かくなん、と聞こゆれば、「かかる所にながめたまふらん心の中のあはれに、おほかたのありさまなども情なかるまじき人の、いとあまり思ひ知らぬ人よりもけにもてなしたまふめるこそ。それももの懲りしたまへるか。なほ、いかなるさまに世を恨みて、いつ

までおはすべき人ぞ」などありさま問ひて、いとゆかしげにのみ
思いたれど、こまかなることは、いかでかは言ひ聞かせん、ただ、
「知りきこえたまふべき人の、年ごろはうとうとしきやうにて過ぐ
したまひしを、初瀬に詣であひたまひて、尋ねきこえたまへる」
とぞ言ふ。

〔手習〕卷 三二七―三二九頁
浮舟が唯一「頼もし人」〔手習〕卷 三二五頁)と想う妹尼の留守中
に中将が訪れるのである。妹尼のように対応できる人もなく、そばに
はただ中将との縁組を望む者しかいない状態を不安に思つた浮舟は、
交流を執拗に迫る中将から逃れるために、普段は近付こうともしない
大尼君の部屋に身を隠す。今まで踏み入れたこともないところへ自ら
足を進めた浮舟の姿は、出家の道に自らの意思で向かおうとしている
ことを予感させる。浮舟はかつてないほど強く意志を貫こうとしたの
ではないだろうか。

浮舟は、大尼君の部屋で苦悶し、中将は、部屋から出て来ようとし
ない浮舟をあきらめて帰っていく。「いみじきさまにて生き返り、人に
なりて、また、ありしいろいろのうきことを思ひ乱れ、むつかしとも
恐ろしとも、もの思ふよ」〔手習〕卷 三三〇頁)という浮舟の述懐
のなかには、過去の苦悶と中将のわずらわしさとが同時に語られてい
る。これらの記述からも、作者が、姿・行動などの点で、匂宮や薫を
想起させる人物として中将を登場させ、動かしていることは明らかで
ある。この後も、父八の宮や姉たちのことに触れながら浮舟の長く冷
静な追憶は続く。薫のことを好ましく思い、匂宮との一件を間違いだ

つたとする思念もこの後に描かれている^(注10)。
このように浮舟が出家の覚悟を固めたところで、物語には再び横川
の僧都が登場する。

⑫ 下衆下衆しき法師ばらなどあまた来て、「僧都、今日下りさせた
まふべし」、「などにはかには」と問ふなれば、「一品の宮の御物の
怪になやませたまひける、山の座主御修法仕まつらせたまへど、
なほ僧都参りたまはでは験なしとて、昨日二たびなん召しはべり
し。右大臣殿の四位少将、昨夜夜更けてなん登りおはしまして、
後の宮の御文などはべりければ下りさせたまふなり」など、いと
はなやかに言ひなす。恥づかしうとも、あひて、尼になしたまひ
てよと言はん、さかしら人すくなくてよきをりにこそと思へば、
起きて、「心地のいとあしうのみはべるを、僧都の下りさせたまへ
らんに、忌むこと受けはべらんとなむ思ひはべるを、さやうに聞
こえたまへ」と語りひたまへば、ほけほけしううなづく。

〔手習〕卷 三三二―三三三頁)
普段はかなわぬ僧都の下山を、女一の宮の加持祈祷というところで可
能にし、浮舟との対面、そしてその出家へと物語を展開させる。僧都
の異例の下山は、いずれも浮舟関係の話とつながっていると指摘でき
るのではないだろうか。

引用は省略するが、浮舟はついに望みどおり出家を果たす。その思
いがけない決断に少将の尼たちは驚くが、浮舟は「世に経べきものと
は思ひかけずなりぬるこそはいとめでたきことなれと、胸のあきたる

心地したまひける。」〔手習〕卷 三四〇頁)と満足するのである。浮舟にとつて出家は、わずらわしいものから解放される唯一の方法であつたのかもしれない。小野の山里での生活を揺るがすだけでなく、苦惱を極めた過去の経験をも思い出させる中将の存在は、確かに浮舟を出家に向かわせる過程において、効果的に働いていると言ふことができる。

四

続いて、出家後の浮舟に対する中将の動きについて考察する。

⑬ 同じ筋のことを、とかく書きすさびぬたまへるに、中将の御文あり。もの騒がしうあきれたる心地しあへるほどにて、中将の御文となど言ひてけり。いとあへなしと思ひて、かかる心の深くありける人なりければ、はかなき答へをもしそめじと思ひ離るるなりけり、さてもあへなきわざかな、いとをかしく見えし髪をのほどを、たしかに見せよと、一夜も語らひしかば、さるべからむをりにと言ひしものを、といと口惜しうて、たち返り、「聞こえん方なきは、

岸とほく漕ぎはなるらむあま舟にのりおくれじといそがるるかな」

例ならず取りて見たまふ。もののあはれなるをりに、今は、と思ふもあはれなるものから、いかが思さるらん、いとはかなきもの

の端に、

心こそうき世の岸をはなるれど行く方も知らぬあまのうき木を

と、例の、手習にしたまへるを包みて奉る。「書き写してだにこそ」とのたまへど、「なかなか書きそこなひはべりなん」とてやりつ。めづらしきにも、言ふ方なく悲しうなむおほえける。

〔手習〕卷 三四一〜三四二頁)

出家後、手習が唯一の時間の過ごし方になつてるところへ、中将からの便りが寄せられる。浮舟の出家を知つた中将は、それを自分の都合良く解釈するが、落胆は隠せないでいる。中将の心から浮舟が消えることはないのである。一方、浮舟は、数々の苦悩から解放されたことで得た精神的な余裕にも動かされて、ここに至つてはじめて中将の文に反応を見せる。自分も出家の道をといて中将の歌もまた、それまでかたくなに閉ざされていた浮舟の心に何らかの影響を与えていると思われる。浮舟のなかで、中将への態度が柔軟になつたことと、薫を懐かしく思うようになったことは連動しているのではないだろうか。

中将は、それでもあきらめきれない気持ちを抱えて、小野の僧庵を訪れる。浮舟の突然の出家を悲しむ妹尼と対面した後、中将は、少将の尼に頼み込んで浮舟の尼姿を見るのである。出家後の浮舟の様子を描くこの場面において、少将の尼と中将の視点は効果的に働いていると言ふことができる。浮舟の姿をはつきりと目にした中将は、さらに想いが募り、その素性に不審を抱きながらも、尼姿の浮舟を自

分のもとに迎えようと妹尼に相談を持ちかけるのである。さらに、浮舟にも交流を求めようと言葉かけをかける。

⑭ こなたにも消息したまへり。

おほかたの世を背きける君なれど厭ふによせて身こそつらけれ

ねむごろに深く聞こえたまふことなど、多く言ひ伝ふ。「はらからと思しなせ。はかなき世の物語なども聞こえて、慰めむ」など言ひつづく。「心深からむ御物語など、聞きわくべくもあらぬこそ口惜しけれ」と答へて、この厭ふにつけたる答へはしたまはず。

思ひ寄らずあさましきこともあり身なれば、いと疎まし、すべて朽木などのやうにて、人に見棄てられてやみなむともてなしたまふ。されば、月ごろたゆみなくむすほはれ、ものをのみ思したりしも、この本意のことしたまひて後より、すこしはればれしうなりて、尼君とはかなく戯れもしかはし、碁打ちなどしてぞ明かし暮らしたまふ。行ひもいとよくして、法華経はさらなり、こと法文なども、いと多く読みたまふ。雪深く降り積み、人目絶えたるころぞ、げに思ひやる方なかりける。

〔手習〕 卷 三五三(三五四頁)

浮舟は中将の言葉に心を許すことなく、型どおりの返答しからないでいる。そして再度、匂宮や薫との過去を心に浮かべるのである。出家した今になっても、浮舟の心に中将の存在と匂宮・薫の存在とは同時に想起されることが多く、一度は払拭されたかに見えた浮舟の苦悩も

未だに見え隠れしている。それは、浮舟の出家姿を目の当たりにしてもなおその執着を断ち切れない中将の行動でより鮮やかに考えられる。ここで語られている浮舟の平穏な生活が長く続くものではないことは容易に想像できるだろう。

尼になった浮舟を引き取って世話をしようにとする中将の姿は、そのまま薫に重ね合わせられるのではないだろうか。今後、浮舟の生存を知ることになったら、その姿がどのようなものであっても、薫は自らのもとに迎え取ろうとするだろう。重ねて強調されてきた薫と中将との共通点は、ここでより強く想起されるはずである。中将はその最後の登場場面において、今後の展開を予告するはたらきをしていると言つても過言ではないだろう。

五

以上、「手習」巻における中将の役割について考えた。中将は浮舟を出家に追いやる過程で、多くの役割を担っていると同時に、薫の存在の大きさを浮舟に気づかせる人物でもあった。

入水という形で一旦物語世界から退場した浮舟が蘇生する場所となつた小野の山里は、都との距離を強く感じさせる地である。浮舟が過去をより深く内省し、内面的に成長するためには、彼女を取り巻くすべての環境を変える必要があつたのだと思われる。作者は小野の山里で、浮舟の周りからその過去を知る人物を一切排除して、浮舟の成長

を描こうとしたのではないだろうか。

その浮舟の前に登場するのは、既存の登場人物でなければ誰でもよかったというわけではない。過去を忘れ、過去から逃れたいと願う浮舟にとって、その過去にまったく関係ないにもかかわらず、過去を強く思い出させる人物でなくてはならないのである。中将はその条件を満たしていると言いうことができるだろう。過去においてかわりを持たない第三者でありながら、常に薫の影を感じさせ、過去を想起させるという中将の無意識の圧力が、浮舟を再び苦悩の淵に立たせるのである。そして同時に、浮舟のなかにある薫の存在を高め、匂宮に傾きかけていた浮舟の思いに変化をもたらすのである。中将を薫と同種の人物に設定したのも、浮舟のなかで薫の存在をクローズアップさせるための用意であったのではないだろうか。過去とは無縁の世界で生きようとする浮舟の前に登場するのは、想起せずにはいられないほど薫に似た人物、つまり中将でなくてはならなかったのである。激しい苦悩の末、内面の深まりを得た浮舟の前に、再び薫が登場し、薫の代替としての役割を終えた中将は物語世界から退場する。

「手習」巻は、内面的に成長した浮舟と、彼女がその存在の大きさを再確認するようになった薫とのかかわりを最後の話題として残し、最終巻である「夢浮橋」巻に譲る。多くの類似点を有する中将と薫であるが、浮舟との心のつながりの上では大きく異なっている。中将とは対照的に、強いつながりを持つ薫が再び目の前に現れた時、浮舟がどのような態度を見せるのが、今後の物語の中心になるだろうこと

は想像に難くない。一巻のみの短い登場ではあるが、物語の結末に向かう過程において中将の存在は不可欠であったと考えられる。

宇治十帖の物語世界は、このように脇役や端役と呼ばれる人物の存在に負っているところが大きいと思われる。中心人物にかかわり、時には事のなりゆきを語るこうした人物の動きが、物語を支えているとも言えるのではないだろうか。

*引用本文および頁数は、新編日本古典文学全集『源氏物語』（小学館）による。

注1 久保重「手習・夢ノ浮橋私見」〔檀蔭国文学〕第六号 昭和四三年一月、秋山虔「浮舟をめぐつての試論」〔源氏物語の世界〕昭和三九年十二月 東京大学出版会、広川勝美「浮舟再生と横川の僧都」〔仏教文学研究〕（四）昭和四一年六月 法蔵館、工藤進思郎「浮舟の出家をめぐつて——中将の挿話の持つ構想論的意義——」〔文藝研究〕第六一集 昭和四四年二月、上坂信男「源氏物語人物論 端役の役割——手習——巻の中将をめぐつて」〔国文学——解釈と教材の研究〕昭和四五年七月、工藤進思郎「浮舟の再生をめぐつて——『源氏物語』手習・夢の浮橋試論——」〔金城学院大学論集〕通巻第四九号 昭和四七年二月、山上義実「源氏物語」手習の巻における中将求婚の挿話をめぐつて」〔金城学院大学論集〕通巻第一八二号 平成一年三月 等参照。

2 この場面の「忍びやかにておはせし人」が誰を指すかについて

は、薫とする説、匂宮とする説、薫・匂宮の両方を指摘する説とに解釈が分かれている。ここでは、薫を指すという通説に従っておく。

3 新編日本古典文学全集『源氏物語』⑥ 三〇五頁。

4 新編日本古典文学全集『源氏物語』⑥ 三二三頁。

5 次の記述である。

さる方に思ひさだめたまへりし人につけて、やうやう身のうさをも慰めつべききはめに、あさましようもてそこなひたる身を思ひもてゆけば、宮を、すこしもあはれと思ひきこえけん心ぞいとけしからぬ、ただ、この人の御ゆかりにさすらへぬるぞと思へば、小島の色を例に契りたまひしを、などをかしと思ひきこえけん、とこよなく飽きにたる心地す。はじめより、薄きながらものどやかにものしたまひし人は、このをりかのをりなど、思ひ出づるぞこよなかりける。かくてこそありけれと聞きつけられたてまつらむ恥づかしさは、人よりまさりぬべし。さすがに、この世には、ありし御さまを、よそながらだに、いつかは見んずるとうち思ふ、なほわろの心や、かくだに思はじ、など心ひとつをかへさふ。

〔手習〕卷 三三二―三三三頁

この記述から、浮舟のなかで薫の存在が大きくなっていることが分かる。

(ふくなが よしこ／博士後期課程三年在籍)